

# 末守記

(岡本慶雲覚書 写)

<講師:吉浦清一、古文書学級>

1 文章を理解しやすくするため、内容を9節に分類する。

- (1) 加賀越中取合の事(天正12年)
- (2) 末森後詰の事(天正12年9月11日)
- (3) 利家卿 越中の内へ切入給ふ事(天正13年2月18日)
- (4) 越中鷹巣焼働の事(天正13年3月21日)
- (5) 鳥越之城攻 付 菊池降参の事(天正13年卯月8日)
- (6) 俱利伽羅・鳥越両城明け退し事
- (7) 今石動軍の事(天正13年5月)
- (8) 阿尾合戦 并 能登勢荒山之取出乗取の事(天正13年6月24日)
- (9) 秀吉公御下向 并 成政降参の事(天正13年8月18日)

—あとがき—

2 表記は以下の例による。

- (1) 各行の末尾数字はページ数
- (2) 文中の『』は原本【古文書講座用資料】の行改め
- (3) 読みやすくするため送りがなを書き加える
- (4) 異体字を現代用字に
  - 異    ○→事    ○→等    ○→州
  - 控    ○→最    ○→    ○→
  -
- (5) 漢文体に返り点を付

## (加賀越中取合の事)

抑<sup>そもそも</sup> 天正 12 年、そのころは北国加賀の内、石川・河北二郡、能登』一國、前田又左衛門尉利家公 分國にて、加州石川郡金沢』に居城し給ふ。

佐々内蔵助成政越中一國の守護と』して、新川郡富山に居城し給ふ。上方は羽柴筑前守』秀吉公と尾張の國 内大臣信雄公(後は常真にて御座』ます)天下のあらそひ取合隙もなし。

かかる時節を内蔵助幸<sup>さいわい</sup> とや思われけむ。越中立山にさらさら越えといふ難所』をこし、供の者上下百ばかりにて東美濃へ出、その此』徳川家康公は内大臣信雄公を見つぎ給ふにより、伊勢』美濃さかひにてたびたび合戦ありし時、北國より切つて』罷出御味方を仕るべく候間、加州・能州・越前三カ國、御本意を遂げ』られ候はば、内蔵助給へかすと、内府公へも徳川殿へも能々』申し合ひ、またさらさら越えより返り申され候。

陣ふれをして人数』出したく思はれけれ共、又左衛門殿は内蔵助殿のためには大敵な』りとて、心の内に工夫をして表裏を企て、佐々平左衛門・神保』安藝守などを呼び出し、評議まちまちなり。

成政に娘二人』之有り、一人は秀吉公へ人質に出し置かれ、上方にあり。』その姉老人之有る候を、利家と古き傍輩と云い、國雙<sup>ならび</sup>なれば』孫四郎殿 能州の守護を婿に取り、後は内蔵助跡をもつがせ可、申よし、下々』迄も風聞をさせ、たばかる間、内蔵助殿より佐々平左衛門尉出で申し、利家公よりは村井又兵衛尉いで申し、既に縁辺相定め』其のうへ向<sup>きょう</sup>後は互いに申し入れ候はんよしにて、先づ佐々平左衛門を』同年 7 月 23 日に使者として金沢へまいらせられ、祝儀』夥<sup>おびただ</sup>敷く持参して、城の堅固をも見せられ候。結局は利家公』よりこそ先に御祝儀をも可、被<sub>レ</sub>遺事なるに、内蔵助殿』より先に参り候事、能々ちなみをふかく有度躰と越中』上下ともに申しあへり。利家二心なき大將なれば、ゆめ』にも知り給はず。家老共も可、燃儀とおもひ、殊の外馳走』にて、又若殿に能をさせまいらせられ、引出物に刀・腰指』・馬などを平左衛門に給はりかへさりけり。利家公よりも』村井又兵衛を礼返しに可遣きよし案内被<sub>レ</sub>仰遣<sub>レ</sub>候処に、』八月は祝儀月に非らず候の間、幾久敷と存ずる祝儀に候条、』九月になされ給はり候へのよしを、内蔵助殿よりかさねて』申し未たり候故、まづさし延べられ候。

かやうに心をとげ、夜々北の屋』倉にて家老四五人召し集め評議して取出をこしらへる』所など相談極まり候処に、越中のたより付き、城をする』よし告る人あ

り。利家公聞き給ひ、此の儀 偽と思ひながら、『かやうの事聞き油断して、末代の恥辱になる事も可』有と思し召し、村井又兵衛・岡島喜三郎・片山内膳・不破彦三を召され、御相談有、之、さらば加賀越中の境目 朝日山』を取出の城にこしらへ候べきよしにて、同8月22日に『村井又兵衛を大将として、高島久蔵・原田又右衛門兩人』をさし添え、鉄砲大将4人、都合千五百余の人数にて、『二三日の普請して棚を付廻し候時分、同8月28日 朝日山 口 請取りに、越中勢佐々平左衛門尉・前野小兵衛尉大将とし』て、被是都合其勢五千余騎を二手に分け押し来たり、是も朝』日山を越中より取出にこしらへ可、被、申との事なり。『村井はや柵をふり廻したるを見て、平左衛門・小兵衛案』に相違してぞ見えける

兩人申すやうは、この取出敵俄か』にこしらへたる所なり。殊には越中勢いで申す事もお』ぼつかなく、人数も多く有るまじく候間、此の取出を責めほ』ろぼし、加州・越中の取合の門出よしと、成政の御感』にあづからんと言ふままに、小兵衛・平左衛門下知して二口』より押し来る。朝日山は大かた取出も出来たれば、居住』候用意に、ばらばら金沢へ帰りなどして、有合たる人数』七・八百人には過ぎざりけり。然れども大将目をく』ばり下知して、さくぎはより二町斗 外に堀切あり。『あれまで立出ささへ、一合戦して勝負をけつせん』と言ふ所に、利家公御馬廻 安浪加藤八・江見藤十郎兩人、』村井を見廻りに行き合い、左右に進んで、めうがに叶ひ今日』参りたるよし申勇候処に、又兵衛被、申候は、利家公へ』注進仕度由に候処に、兩人飛脚にて急ぎ可、然由』有、之時、いやいや飛脚にては慥かなる儀聞えぬもの也。』江見・安浪加兩人参り、此通被、申上、候へと有りければ、金沢』に有、之候共 御見廻可、仕に、幸いねがふ所なれば、中々』思ひもよらず候と申切て進みける。村井 此兩人を何とぞ』して注進にかへし可、申と心の内におもひ、道に』はや一揆おこり可、申候間、氣遣成事と申されければ、その時兩人申すやう、此御言葉を承り、注進にまいらずんば、』中々已来の恥辱にも成りなんと、残多げに馬』牽よせ打乗りける。誠に急成時出でたる申されやう、ゆゆ』しく覚えたと皆申しあへり。

朝日山より金沢まで』四半里の道を、一刻に兩人馳せ返り、此よし一々利家公へ』申上げければ、又兵衛 我が下知なくしてもさやうのこと仕』兼ねたるものにて有、之。然 共いそぎ後詰せんと、不破彦三・』多野村三郎四郎・片山内膳・岡島喜三郎・原隠岐・武部助十郎』などを先手の大将として、その外 宗徒の軍

士ども い』そぎ いそぎ打立候へと触れさせ、そのまま かひをたてさせ、』利家公いでさせ給ふ。心がけの小姓・馬廻五六十騎』御供にて、まづ小原口と云ふ所までいそがれけるこそ』たのもしけれ。

然る所に朝日山にては、越中勢ふもと』までをし寄せたれども、大将又兵衛の強威にやおそれ』けん。大雨も降出しければ遠巻に人数を備へけり。それ』よりこそ度々の合戦になりたりけり。

さて能登国』七尾の城には一国の人数過半置き給ふ。本丸には利家公』舎兄前田五郎兵衛尉・子息孫左衛門尉・高畠織部・中川清六・国侍に長九郎左衛門尉(徳丸山に居住)、その外名有侍ども、都合その勢』三千余騎入置及ぶ。加賀・能登・越中三ヶ国の境目末守(能州羽喰郡)』と言ふ所に、利家公入国より城有りて、爰には奥村助右衛門尉』・千秋主殿助・土井伊豫守を大将として、その外軍士ども』都合其勢千五百余騎入置き給ふ。つばたと云ふ所、是』は利家公舎弟前田右近将監城主に入置る。加州越中の』境山きはに鳥越と言ふ所丈夫にこしらへ、目賀田又右衛門・丹羽源十郎兩人を大将分にして、名有る侍ども、都合』五百余騎入置かる。

さて、佐々内蔵助成政より、くりから峠<sup>とりで</sup>を取出にこしらへ、佐々平左衛門尉・野々村主水兩人を大将』として、其外名有る侍ども都合その勢二千余騎入』置かる。井波の城には前野小兵衛尉を大将として、その外』軍士ども都合二千余騎置かる。青の城には則ち国士』菊池伊豆守・子息十六郎大将にて手勢千騎斗<sup>ばかり</sup>にて扣<sup>ひか</sup>へたり。』能登越中のさかひめ あら山と云ふ所を取出にこしらへ、』能登七尾の押へとして名有る侍共かわるがわる番勢に』入置る。越中森山の城に成政あいやけ神保』安芸守・子息清十郎、是は成政の<sup>むこ</sup>聲也。大将にて自分の』人数四千騎にて扣<sup>ひか</sup>えたり。互に守りあひてぞ見え』にけり。内蔵助殿は新川郡富山の城に住居有りて、爰』かしこに打出で働き給ふ。

右の趣 利家公より使者を以て、』其の比までは羽柴筑前守秀吉公へ被<sub>レ</sub>仰上<sub>レ</sub>候へば、』なのめならず御感有りて、扱<sup>さて</sup>も先年柴田を討ち果たし候刻、内蔵助 ひやうり者を若年よりよく知りたる』間、彼者おさへと申し召し、又左衛門尉を加州に置候事、我』目利きあいたがはず。右の趣 神妙に思召す由にて、又左衛門・内蔵助両方人数をたて合ひ一戦』におよび候はば、前田人数小勢なりとも大利を可得。』心元なき事の有れば、又左衛門分国 能登加賀三十里』には過ぐる ほそながき国、越中よりは出やすき所候間、』能登へ助候事如何と斗<sup>ばかり</sup>

案事候。然れ共利家それに『御入候間、心易く思ひ候。よくよく越中勢をおさへられ候へ。』頓やがてこもと而爰許の敵どもへいきんに申しつけ出馬可<sub>レ</sub>有と、『かの使者に御口上にも被<sub>レ</sub>仰聞<sub>レ</sub>、すなはち使者 多野村三郎四郎に引出物黄金』三十兩被<sub>レ</sub>下けり。

### (末守後詰之事)

一、同年九月十一日、末守の城へ、内蔵助成政人数をいだされ『我が身は二里わき、つばい山と言ふ所に、本陣をすへ、先手は山下甚八・佐々平左衛門・前野小兵衛尉・野々村主水・菊池』伊豆守・同 十六郎・寺島勘助・同 牛之助・本庄市兵衛尉・野』入平左衛門尉・齊藤半右エ門尉・佐々予三左衛門尉・堀田次郎右衛門尉』・桜勘助、かれらを大将分にして、都合其勢八千余騎』押し寄せ、町を放火せんとせし処に、城中より土井く土肥>伊代守、』町を破らせては無念なる次第と言ふ俟ままに、上下二百斗』にて打出で、しばらく防ぎ戦ひ、四方八方切て廻りけれども、』大勢きひかかり、もみにもんで責めければ、何れものこらず討ち死にす。城中には奥村助右衛門尉・子息 助十郎・千秋主殿』之助・滝沢金右衛門、その外の勇士ども、下知して めをく』ばり持堅めければ、成政申され候は、さだめて利家 加州』より後詰する事可<sub>レ</sub>有。その押さえとして国侍 神保』安芸守・子息 清十郎を大将にて四千余騎、川尻と』言ふ所にさしいで、山取りして加州よりの道をしきり。待ち』うけたり。

然る処に末守よりの注進、利家公へ申す処に『聞入りたまふと、金沢の城には、舎兄 前田蔵人入道・魚住』隼人、その外名有侍共留守居として残し被<sub>レ</sub>置候。不破』彦三・村井又兵衛兩人を先手の大将として、金沢を即日十一日の未刻に打出で給ふ。

松任と云ふ所、金沢より三』里上かみのかたなり。利家公御子息孫四郎（後は肥前守）居』城なれば、いそぎ出でられ候へ。末守の後詰すべしと使者』を被<sub>レ</sub>遣。能州の人数も、七尾には前田五郎兵衛父子を被<sub>レ</sub>残、其の外軍士ども、のこらず末守へ向ふべしと被<sub>レ</sub>仰遣<sub>レ</sub>。』彼あれこれ是時刻うつり被<sub>レ</sub>打立<sub>レ</sub>候へば、未の下の刻になりけり。』

津幡の城まで四里の間を、先いそがせ給へば、舎弟 右近』将監御むかひに 町はづれまで出むかひ被<sub>レ</sub>申、少らく当城に』て人数を御揃へ、また

孫四郎殿を待請けたまへと被<sub>レ</sub>申ければ、さらばとて城にいらせ給ふ。とかくの間<sub>ニ</sub>に戌の』刻に利長も津幡に着せられ、利家公・利長公』御父子・先手の村井又兵衛・不破彦三、其外家老大名小名』召よせ、軍の評議あり。

先づ軽々と津幡まで利家公出馬有りて、軍士どもの心を勇め給ふ事、流石 信長公に』若年より傍ちかく奉公有り、軍の方便能く知りて』物馴れられたる大将と、皆一命を捨て討死せん事を』露ほどもおしからじと、勇を成す事限りなし。其時』大名小名<sup>なみ</sup>並居たる中にて利家公御威言には、内蔵助』とは互いに若年より、たびたびの合戦に出合候。然れども此の』利家を越す事一度もなかりし、其上彼者かぶひたる』武辺なれば、敵よはきには得<sub>レ</sub>勝利<sub>レ</sub>る事も可<sub>レ</sub>有。利家』を敵にしては中々思ひもよらず、たとへば夜中の後詰』にて候へば、味方の人数小勢、あなたは多勢成りとも、討合』候とも、一合戦して大利を得べき事、案の内也。かま』ひて、我が下知のごとく可<sub>レ</sub>仕と たからかにのたまへば、何れも夜』の明けたるやうに心も晴れて勇みけり。

さて寺西二兵衛』入道・前田右近将監<sup>など</sup>杯相談し、早<sup>はや</sup>末守の城は落去する』事可<sub>レ</sub>有。殊には神保を四千余騎にて押へ指出し置候へば、』とても味方利をうしなひ給ふべし。同じくは、末守は すてさ』せ給ひ、此所を丈夫に持堅め給ひ、秀吉公へ御注進なされ候はば、此のおもてへ急に御出張可<sub>レ</sub>有。身をばまつとうし』て大利を得たまへ と被<sub>レ</sub>申ければ、利家公聞<sup>きこし</sup>召して、事の』御気色<sup>しき</sup>替わり、さやうの よはき異見にては 軍士ども気を失ふ』者なり。人は一代名は末代、自国へ一足なり共踏入れ、』剩<sup>あまつさ</sup>へ奥村・千秋・土井を すてごろしにし候へば、天下を知りても』人の嘲り如何せん。内蔵助数万騎もあらばあれ、我が小姓・馬廻にてなりとも一合戦して勝負を可<sub>レ</sub>付とのたまひて、』やがて村井又兵衛尉を一問所へ召寄せられ、とにかくに』合戦とおもふはいかに と仰せられければ、又兵衛申すやう、御意』御心に存じ候故、合戦をとげられ、可<sub>レ</sub>然といさめ申せば、利家公』急みをふくみたまひ、我が心と同事たるは、村井にしくはなしと仰せられ、はや打合給ふ処に、右近将監 湯漬御』めしをとりつくろひ上げられ、その内にかさねて申上げらる候は、』上手の博士御座候間、時取をも見せ御立可<sub>レ</sub>然し被<sub>レ</sub>申』ければ、御気色よからざれども、如何やう共と仰せらる処に、』五十斗成る山伏まかりいで候時、利家公御覧じて、』

はかせは其方かとのたまへば、かしこまって候と、かの山伏ふと』ころより物の本を取出す。其時とかく後詰する間見よと、』こは高に仰せられければ、彼入道物の本をふところへ押』入れ、時も能御座候と、利家公御気色を見候て、物の本』をも見ずして申しければ、殊の外御感あり。さても心得』たる上手かな。頓而大利を得 帰陣の時、ほうび可遣と』仰せられ、御心よげに打立ち給ふ。利長御馬しるしを津幡』町ばへまで横山三郎持ちいで給ふと聞こえし。兼ねての』ごとく 先手の大将 不破彦三・村井又兵衛兩人を左右の』先手をさせ、そのつぎつぎへ付随ふ士大将には、原隠岐守』・前田又次郎・多野村三郎四郎・武部助十郎・片山内膳・岡島』喜三郎・前田慶次・青山与三・近藤善右衛門、その外 名有る侍』共勇みに勇みて懸けいでたり。

爰に笹原勘六ととて 利家公』側近にめしつかはれし者、其比いまだ廿三歳になりしが』よこねを煩ひ、起臥さへ事由ならず候へば、金沢の城に舎兄』前田蔵人と番守仕候へ。』

合戦のならひなれば、利家討死』せば城を随分持ちかため、叶はぬ時は城に火をかけ腹切れ』と仰せけれども、中々請申事は不及申、耳にも不聞入、』唯々御供可仕よし申す。内々名有侍共二十騎ばかり、』利家公より付置かれたる者共を引ぐし、乗物にて川』尻迄かけ付け、爰にて具足を着て、笹原勘六こそ是迄』はや来たるよと、大音をあげ進みたる有様、誠に後の代』まで名を留めしと、誉めぬもの社なかりける。

神保安芸守』山取して加州勢の押へとして待かけたれば、利家公 津』幡の城迄出られたれども、後巻中々成るべからざるに』相究りたるよし、神保より付置く目付の者 かへり申すにつき、』實にもさぞあらんと、少し油断して居たる所を、利家公』先手の彦三・又兵衛の所へ御出有りて、三人御談合被成見斗』はれ、浜ばたを一騎打に馬の舌をまかせ かけとおり、』無難旗本までも掛通りたり。或いはこなたかなた取出に』居陣し、又はおくれたる侍上下五六百騎一里ばかりも』跡より追々かけつけ候を聞付け、神保はすは利家こそ』只今後詰にとおられ候と思ひ、鉄砲を打ちかけささえけり。』その間に利家卿中入して人数をしたまふ御勢。十(唐)高』祖百張良が勢いも、是にはいかで増るべきと、上下感ぜ』ぬものはなかりける。

さて 今浜と言ふ所の右のかた成る すな』山へのり上ると、ほのぼのと明け方になりける。そのとき』利家公 御馬をのり廻し下知し給ひ、兵糧つかい候へとのた』まひて、味方の人数をつもり見給へば、孫四郎殿人数七八百騎斗、彦三備七百斗、又兵衛備六百騎、御旗本千』五百騎余には過ぎざりけり。利家公味方の武者色を御』覧じて、早や合戦には勝利を得たるぞと被、仰ければ、』御近所に乗りたる徳山五兵衛入道など、御意<sup>もつとも</sup>尤もと申す時、味』方の人数は六千余騎有るべきと見えたり。夜中に是へ馳せ付きたる軍士どもは、死をかるんじたる者どもなり。敵数万騎有りとも、味方の人数増るべし。構えて首ばしとるな。』只忠功をはげまし、太刀のはのつづくほど 打捨てにすべしと、大音上にて仰せられければ、上下氣を得て夜の明けたるやうに覚えけり。

さて人数を押し給ふ』処に、道二筋あり、一筋は末守へ、今一筋は内蔵助殿本』陣 つばい山と言ふ所への道也。其れにて村井又兵衛尉 利』家卿に乗り向ひて申すやう、つばい山に内蔵助有、之 油』断してあらんなれば、旗本へ切りかけ勝負をつけ可、申のよし被、申ければ、利家公<sup>もつとも</sup>尤もに候へども、つばい山にて』定めて足がかり能<sup>よき</sup>所を見立て内蔵助陣とるべし。末守』は味方の城なれば、内外もみ合い一戦せば、など勝利』を得で有るべきとのたまへば、かさねて又兵衛身をもだえ、是非とも内蔵助旗本へ切りかけ勝負をつけ』申さば、大将を討つ事も可、有と申されけれ共、利家公』此戦の儀は我が下知次第に仕候へと いかって仰せければ』村井ちからおよばず、末守の城へ押廻しける。かやうの時分大将に勇を付け、軍の手立申すもの一人もなかりけるに、』さてもゆゆしき家長かなと、利家公後々までも』感じ給ひける。

しかる所に、はや村井内にて間野』新丞首をとって来る。小林六左衛門・三木十内・屋後』太右衛門、その外誰某<sup>だれかれ</sup>となのり、首十一 手にひっさげ』又兵衛に見せ候処に、急ぎ御本陣へと被、申ければ、』利家公の見参に備えければ、物はじめよしと御感有』りて、はや けふの軍大利を得んするしるしには、一番首』の見様有りと仰せられ候へば、徳山五兵衛入道、御<sup>ごもつとも</sup>尤もに御座候。』但し あまり御言葉めいめいに御かけ候て、御息きれ候へば』如何と申されければ、げにもと思召し、其後は首持て』参る者にも、秀でたるはたらきなきものには、大形の御言葉也。さて不破内にて



不破十左衛門・四郎左衛門・平野齊宮、その外誰』某と名乗り、首八ッ討取り、是も彦三に見せ、則ち利家公』の見参に入れければ、いよいよ御心よく思召し、前後を下知し』給ふ。

扱も末守の城 二の丸に有りける千秋主殿助、瀧沢』金右衛門、其外勇士ども、越中勢 責入るを防ぎ たたかひ、度々』こみ入ればおい出し、手柄をつくすといへども、猛勢なれ』ば 事ともせず、終に押こまれ、都合百騎ばかり枕を』ならべ討たれにけり。

扱こそ本丸ばかりに成りにけり。扱また大手は敵味方入乱れ、村井又兵衛殿・多野村三郎四郎など、』自身鑓やりを入れ 散々に戦ふ処に、村井又兵衛と越中先手』の佐々与三左衛門と鑓を合はせ、散々に つき合ひける処に、村井』上鑓になりて与三左衛門をつき臥せける。越中にて先手の』大将分なる者なれば、兵ども助 来り、三十斗 まくらをな』らべ討死す。いよいよ加州勢 大将 又兵衛、自身鑓を合はせ勝利を得たれば、どつとつき崩し勝時を上げたりける。』

搦手より利家公を城中へ入可、申とて登らせ給ふ所に、成政内にてても、名を得たる軍士ども爰にも』取合はせ、野々村主水・本庄市兵衛・齋藤半右衛門・桜 勘助・堀田次郎右衛門など、最期と防ぎ戦ふ。中にも桜 勘介』は鉄砲の上手にて、あだ矢はさらになし。利家公 御近所』に御小姓には 笹原勘六・富田六左衛門・北村作内・村井又六・木村久三郎・富田孫六、御馬廻には 半田半兵衛・山崎彦右衛門』・野村伝兵衛・小泉弥市郎・井口茂兵衛・奥村弥市郎・阿波加藤八』・江見藤十郎・吉川平太・岡本七之介、其外勇士五十騎』ばかり続いたり。たがいに見合る処に、半田半兵衛つと』たち、一番鑓を見よと言ふ処を、桜 勘介鉄砲にて』うつ。半兵衛左の手を かたへかけて打ぬき、鑓をだいてころ』びたり。敵味方とは申しながら、半兵衛と勘介は従弟の間』なれば、うつは討たれども、つねづね さし物をも見知り』、名乗りたる声もきき、扱も半兵衛死にたるか、不便なると』申すよし、のちにこそ聞こえけり。然る所に利家公、かやうの』鉄砲すじに足をためさせて、手負多く出来申すもの也と。』御馬駿をふりかかれかかれと下知仕給ふ。其時 野村伝兵衛・』山崎彦右衛門・笹原勘六・富田六左衛門・北村作内など鑓を打』入れ、しばらくのほど黒煙を立て つき合ひしが、越中勢』追崩され、その口の大將分には、野

々村主水・本庄市兵衛・『齋藤半右衛門・堀田次郎右衛門・桜 勘介、其外歴々名乗合ひ、『鑓下にて七十余騎討死す。加州勢 首どもを討取り、『勝時咄<sup>はなし</sup>とあげたりける。扱<sup>さて</sup>こそ からめてより利家公・『利長公城のうちへ入給ふ。

其後 鑓の吟味有りて、半田半兵衛『鑓場を見立候へども手負申候。山崎彦右衛門・野村伝兵衛、『一番鑓をあらそひ申せしを、利家公御吟味に成り、同鑓と言ひ『ながら、伝兵衛一番鑓と名乗りたる間、伝兵衛一番鑓と御『感状を被<sub>レ</sub>下ける。扱<sup>さて</sup>兩人加増をつかはされ、千石宛にな『されける。かやうの吟味こそ手本なれと上下申しあへり。『半兵衛も千石に被<sub>レ</sub>成、其上に歩母衣<sup>かちほろ</sup>十五人与力に付給ふ。『かやうにその品々に被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>候へば、上下いさみ命を軽ん『ぜざる者なかりける。

扱<sup>さて</sup>て又 末守後詰に利家卿『被<sub>レ</sub>参候よし 坪井山へ聞えければ、内蔵助殿<sup>そのま</sup>其儘うち出『で、佐々平左衛門其外に宗徒人々を前にあて、八千騎にて『成政かかり来る所に、利家公 ねがふ処の幸なり。只今『内蔵助が首を見る事 何のうたがひ有るべしと、その内はや『軍法を定められ、人数もつかれたらんずれども、又一番『合戦を村井又兵衛に仕候へと仰せられければ、又兵衛心よ『げに御請申しければ、さても弓矢とつての面目とうら『やみ ほめぬ人こそなかりけれ。二番城主奥村助右衛門・多野村『三郎四郎、三番不破彦三、四番利長公、五番利家卿」旗本也。かやうに急なる時、軍法を定給ふ事、ためし すぐ『なき名大将と、心有る侍どもかんじあへり。

かかる所に 川尻ありける神保安芸守、末守の事を聞付け急ぎ『馳来り、神保に押へられたる加州勢も ことごとく末守へ『来たり。

爰<sup>こゝ</sup>に能州にをかれし軍士ども、末守へ後巻『に出馬する間、夜明けがたに参着し候やうにと、利家公より『折紙被<sub>レ</sub>遣ければ、七尾には何れも馳集り相談有りしに、『高畠織部など、いやいや軍のならひ利家卿後詰可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成『と思召せども、道まで敵押可<sub>レ</sub>申事も候て、末守へ御こし『なき事も可<sub>レ</sub>有。能登勢わずかに三千騎には過ぐべからず。『敵に出合ひ一合戦もなるまじく候間、今一度の御左右を待『可<sub>レ</sub>申と有りければ、何れも此儀に同事けり。長 九郎左衛門尉、『いやいや末守の後詰有無の二つ也。利家公如何とおぼしめす『御心あらば、よも能登を明けて出向ひ候へとは被<sub>レ</sub>仰越<sub>レ</sub>

間敷候。兎角』人はともあれ、利家公 御判形到来の上は、長にをいては』末守へ罷り越すと言ひすてて ざしきを立ちたるを、ほめぬもの』こそなかりける。手勢千騎ばかりにていそがれけれ』ども、利家卿勝利を得給ひ候処へ、二十町斗こなたへ』人数相見候へば、利家卿見付給ひ、是は能登勢か。但し敵』より能州境目に入れ置たる人数が、末守を責むるよしを聞き、』敵見つぎ勢ならば、蹴散らせと、物見を則出され候へば、』長 九郎左衛門也。さてさて無念の仕合、遅く参りたる事。高畠・』中川清六におさへられ、かかる御合戦に不<sub>レ</sub>合事、冥加に』つきたると、物見に出たる脇田善左衛門・野村七兵衛の前』にて もとゆひを切申されけり。兩人乗返り其由を利家卿へ』申上ければ、事の外御感有<sup>さて</sup>り。扱も手柄無<sub>レ</sub>比類<sub>レ</sub>事。長一人』被<sub>レ</sub>参候事、類<sup>たぐい</sup>不<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>有と、還て御感悦に預りけり。

同十二日辰の刻に 内蔵助人数を引ぐし、いよいよ今日の合戦不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>成』と思はれ、山手へついて引退く。利家公人数を付給ふべしと思召し、』先手へ御出有て、村井又兵衛と御見つくるひ候へども、』味方より出候所はせつ所、敵引取所は道筋よき所なれば、』勇みにいさみたる軍士どもを制しとめられ、人数を御付』なく候。越中勢も 足をも不<sub>レ</sub>乱。成政下知にて軽々と引取り、』段々に備へのきたる事。さすが内蔵助殿も物なれられ』たる大将と申す者も多かりける。

然る所に利家卿仰せられ』けるは、津ばたの城にも無勢なり。敵と朝の合戦に』利をうしなひし無念におもひ、津ばたを責むる事も有』べきとて、末森の城には 右のごとくに助右衛門を大将にて、』其外 士大将分五六人くはへ、人数残し置かれ、何時によらず』かさねても内蔵助 此表へ人数出し候はば、時日をうつ』さず馳せ来るべしと仰せ置れ、奥村助右衛門・千秋主殿助などに、』御褒美を給はり、さてまた討取 首ども記すに、都合』七百五十三也。手柄の品々かさねて御吟味有るべしと』仰せられ打立ち給ふ。其時 味方勢御覧候へば、いきほひ余りて』一万余騎になりけり。

不破・村井兩人を先手の』大将として 濱へさしかかり、内蔵助殿の跡をしたふて』御馬を打入給ふ処に、一向 成政 津ばたへは心懸けなく、』足懸り能き所を見合はせ 人数を入れられけり。かかる処に』鳥越の城の近所を通られ候。彼城の押へをすへ』被<sub>レ</sub>通候処に、加州より入れ置かれし

目賀田又右衛門・丹羽源十郎』かれら兩人は 末守にて利家公合戦に打ま  
け給ひしと』風のたよりにきき、其日午の刻に城を開けのきにけり。』

成政よりの 押への者物見にいて見候へば、明きたる城なれば、』のぼ  
りばかり かざりあれども、人数は見えぬ間、此よし』内蔵助殿へ注進仕  
ければ、是天のあたへかど、朝味方利』をうしなひしに、有がたき事なり  
とて、鳥越の城へ』先入給ふをば、利家卿 露ほども知りたまはず。津ば  
たの城』まで御着有りて、其より取出の城々へ、末守にて大利』を得 人数  
打入候間、いよいよ能く守護仕候へと被<sub>レ</sub>仰遣<sub>レ</sub>候処に、』鳥越へ参りたる  
小林喜左衛門やがて乗返り、利家卿へ、鳥越』は明けたると見申候。敵の  
勢 入かはり相見申と申上候へば、』利家卿おどろき給ひ、扱も無念なる  
次第なり。則ちかけ』返し一合戦すべしと、御身をもふていらちさせ給へ  
ば、』不破彦三・村井又兵衛・徳山五兵衛入道・片山内膳など、御意御尤<sup>もつとも</sup>  
に』御座候へ共、今朝大利を得させ給ひ候上は 鳥越ほどの』小城をば、そ  
の俣<sup>ま</sup>をかせられ、先御馬を入れられ、かさねて御手に』入候事、ほども御  
座有間敷と申せば、さらばともか』くもと仰られ、同十二日酉の刻には金  
沢の城にうち入』給ふ。御留守の侍、町人上下町すへまで御迎へに罷<sup>まかり</sup>出、  
是は』目出度御事なりとよろこび申事限りなし。

さて上方へ』使者を以て末守の様子 秀吉公へ利家公より注進被<sub>レ</sub>成候』  
処に、彼使者に御対面なされ、利家 忠切中々申すも』おろか也と御感有  
りて、前廉より従<sub>レ</sub>内蔵助<sub>レ</sub>人質を取』をかれ候、則ち内蔵助の息女九つに  
なり申され候を、お乳』もろともに、粟田口にはたもの<sup>こぞつ</sup>にかけさせられ  
ければ、』其時上下誉<sup>とめ</sup>て、さても内蔵助此上は天下を知りても』いらざる  
事と あはれをとめ、袖をしぼらぬ者はなかり』ける。然る処に後は無事  
に成り、御佗言<sup>わび</sup>申され、秀吉公』御下知に随ひし時、利家公は不<sub>レ</sub>申及<sub>レ</sub>、  
大名小名爪はじき』をして申され候も、ことはりなりと申しあへり。』

一、同年十月十四日に鳥越近辺へ利家卿人数を被<sub>レ</sub>出、』越中の国境目民屋  
ども焼払ひ給ふ。鳥越山城なれば節所にて有りければ、』利家公此城可<sub>レ</sub>  
責事如何可<sub>レ</sub>有とおおせけ』れば、不破・村井・多野申すよう、攻略申さん  
事 たやす』かるべし。然れども城中にも二千余騎入置よし承候間、』味方  
三分一は損じ可<sub>レ</sub>申候。内蔵助富山城に一万騎にて』むかへ申候間、大事を

御かかへ、是程の小城にて 人数ついや』され候はん事如何可有御座と被申ければ、實に實に也と』被仰ける。何とぞし城中より足ながに人数をおびき』出し、付人にと思召し、よはよはと足輕を出し給へど、城中』にも 久瀬但馬を大将として軍士多く籠りたれば、少しも足輕』不出。諸卒の気をはげまし、とかく城をもち堅め候』事かんようと会 釈ければ、先づ利家公 近所ことごとく焼拂ひ』人数を打入給ふ。其後北国のならひ風雪夥しければ』互に矢留と見えにけり。

### 利家卿 越中の内へ切入給ふ事

一、明くれば天正十三年、山々の雪も消え、二月十八日に成りければ、』利家公 村井又兵衛をめしで、鳥越を目賀田・丹羽兩人』あけのき、敵勢入かはる事 是無念に候間、越中国の内へ』押よせ深入して働度きよし被仰ければ、承候とて村井』内家老ども呼寄せ内談仕ければ、すなはち村井内小林』大納言・屋後太右衛門と言ふ者、本国越中の生にて能く案内』知りたれば、蓮間と申して安江と今石動の間に足懸』よき寺有り。越中にてのよき所と、利波・中郡両郡の』あれ者 強気もの共 彼の地に有之間、是をやき立候』はば 敵のよはりにて可有御座と申す処に、此由を利家卿』へ申上げければ、尤』と被仰、則私先を可仕とて、村井又兵衛』一番、二の目は松任勢 利長卿人数 近藤善右衛門・山崎少兵衛』など大将分として八百余騎、右は岡島喜三郎・片山内膳・』多野村三郎四郎大将にて八百余騎、其より不破彦三・』武藤(部か?)助十郎・前田又次郎、其次々段々に備へ、村井千騎』ばかり、四井主馬と言ひし 夜とうをも引ぐして、件の屋後・』小林をも案内者として、加州さかひめを打出で、越中の内へ』四里のあいだ、同二月二十四日戌刻にいで押寄する處』に、四井』申すやう、如何にしても 此くらきに十方なく候間、今夜は』先人数を御引入候へと申せば、村井被申候は、利家卿』御前にて御請申参る我等の事に候間、彼はすのまへ』我をつれて行き捨て各は帰り候へと被申候。さて明くれば』二十五日のあかつきに、蓮ノ間近辺彼大寺一度に焼立て、』あたるを幸に男女のきらひなく、三百ばかり切捨にする』處』に、如案きふね いなみ近辺の城々よりひしと付き』たり。本より村井 物馴れたる大剛の兵なれば、軍士共の』気をはげまし下知し、軽々と引退する處』に、両城より もみ』

合つきかかり 火出るほどつき合ひ、村井内にて兵ども鑓こ下にて歴々七八人討死したりければ、残る兵共つき立てらられ、村井旗本まで味方崩れける處ところを、又兵衛馬じるししを前に押あて踏留ふみとどまり、大音聲をあげていたく鑓こを合せ、能き武者五 六人つきたをし つきたをしする所に、返し合たるら兵共には、村井与力・吉川平太・江見藤十郎・大窪小五郎・屋後ら太右衛門・阿波加五郎右衛門・小林大納言、其外是二十騎ばかり、ら大将又兵衛左右にて鑓を合せ、吉川平太中にも大将にらこされぬる無念におもひいらち懸るに、つきら合ふ鑓をつきおり、太刀打して鑓下の首を取り、其儘そのままつき崩し、ら究竟の兵ども十三首を打取り 勝時をどつと上たりけり。らさて しづしづと引退く。二の目松任勢 請取申候。只今は御手ら柄なりと言ふままに、近藤 山崎くぼめを賦り、何れも利長卿ら内にて勇士ども歴々、心をはげまし鑓ぶすまをら作り待かけたる處ところに、越中勢 村井につき立てられ候ら事ほいなしと思ひ、両城より出たる兵ども二手にらもみ合、三千余騎真丸になりてつきかかり、黒煙をら立て突合けるが、何とかしたりけん。松任勢つき立てらられ引退く處ところに、村井物馴れたる兵にて、頓而人数を備えらけるに、案のごとく近藤・山崎突立られしを見てら横鑓につきかかりけり。爰に岡島喜三郎備に平野五郎右衛門・ら河村善五郎・長田猪之助と言ふ利家卿鉄炮大将なるが、ら村井取次ぎの者にて有る間、百余人の鉄炮にてたすけ来る。らいよいよ手いたく討立 つき立、七 八十騎うち取り、高所へら人数を引のぼせ陣取たれば、両度の戦に能き兵ども百ら騎斗うたせ、叶はじとおもひ、城々へ取こみ、森山神保ら方へしきなみの注進して、急ぎ後詰あれ。加州勢足ら長に是まで働き、無念に存じ候間、その内に富山より成政もら御出可有。一人も洩らすまじきよし申されけれども、その間五里らの道なれば、神保もはかゆかぬまに、ゆるゆると加州勢らささめき立て引取ける。利長卿御父子越中の国中までら御馬を出され、味方自然利をうしなひ候はば後詰可有らと待給ふ處へ、両度に討取る首名有る兵共八十、御父子ら見参に入申ければ、殊の外御感有りて、村井事かやうのら儀めづらしからずと仰せられ、村井が具足羽織に矢鑓らにて多くつらぬいたるを御覧じて、利家公御具足羽織らくだされ、御陣わきざしもくだされける。かかる處にら片山内膳と言ふ人、今日の物語を御前にて申すとて、ら蓮のまのやうす語り申す。すこし主の威言まじりに申しけれ

ば、『利家卿その威言を又兵衛にいはせたきぞと仰せられ』ければ、さらぬていにもてなしけり。村井兩度の戦に『利を得申すのみならず、越中の内へ四里の間、先手・殿しんがりまで』して十死の身をのがれ、殊に手柄を盡しつく帰陣し『たる事をも、いげん御前にて不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>申事、文武の侍』やと誉めぬ者こそなかりけれ。さて今年の戦『はじめ心地よしと悦び給ひ、利家卿利長卿御父子 さざ』めき立て人数を打入給ふ。金沢の城にて村井又兵衛』を召して今度のいちいち聞召され、吉川平太・江見藤十郎』・屋後太右衛門・小林大納言・此四人に黄金二十両宛 小そで』二つ宛給はりける。その外十二人黄金十両宛被<sub>レ</sub>下、彼』助すけ来たる三人の鉄炮大将には米百石宛小袖道服』などくだされけり。その品々残所なく御感なされ、『さて一兩日過候て 村井又兵衛尉めして、二千石の加増』の地をあて行はれける。如此 御はからひ有りしかば、上は』申不<sub>レ</sub>及、下がしもに至るまで忠功をいたし度と、はげ』まぬものこそなかりける。

### (越中勢鷹巢焼払之事)

一、同三月二十一日成政人数を被<sub>レ</sub>出、蓮の間を焼かるるのみならず、人数を討たせ無念に思はれ、加州境目へ打出で、『山手へかかり一里あまり踏入り、たかのすと言ふ所へ 焼は』たらき、民屋少々放火せし所に、彼地より注進有る』とひとしく、金沢城より三里半山手なれば、時刻』不<sub>レ</sub>移、利家卿ふれにも不<sub>レ</sub>及、早かひをたてよと御身』をもうて打出給ふ。城に有合たる小姓馬廻 又は かひ』を聞くとひとしく、心がけの侍ども五六十騎御供として』かけたりけり。もみにもんで三十町斗馳つかせ給へば、『ほのぼのと夜明けにけり。さて見たまへば、十町斗先に人』数相見し處に、馬しるしを見給へば、金の打手の』こづちに あかきのうれん付きたるなり。扱は村井又兵衛にて』有りと見えたり。扱も早速出けると御感有りて、其』よりのり出し給ひ、先へ御出有りて御覽ずれば、村井 百』ばかりにて真先まっさきにかけ、不破彦三・多野村三郎四郎・片山』内膳など二陣に、村井より七八町ばかり跡に三百斗』にて懸けたりけり。利家卿御覽有て、恐らくは今朝の』先がけ某と思ひつるに、各に先をせられ申す事よと』大いに御感有て いそがせ給ひけり。彼者どもはやく』懸出すは、何も金沢の城 二三の丸に有る故、一番かひを』聞くと、有合たる兵共斗にて、馬引よせ 打

乗懸た』りける。殊に村井は二の丸に有ければ、彼地の注進聞き』もあへず、打出かけたれば、真先にこそいでにけり。右』のごとく又兵衛いそぎけれども、越中勢深入して』いぶせきとや思ひけん。在所一二ヶ所焼立ると引に』ける。然れ共加州越中境にてのきを』くれたる兵共を三十八騎 村井不破手へ討、それより追討に討つ處に、』越中よりせつ所せばみへ引請け、福岡与四郎・佐々平左衛門尉』などふみ<sup>とどま</sup>り、鑓を入れやうやう引退りけり。其より』討捕たる首共持たせられ、當年兩度の戦に多くの首数』を見る事、吉れいなりと悦びたまひ、さざめき立て』人数を打入られけり。

### (鳥越之城攻 付菊池降参之事)

一、同卯月八日に利家卿・利長卿を先手として、段々に人数』を備え 鳥越へ押よせ、近辺の山々へ上り給ひ、強弱』を御覽して攻度しと思召せども、足がかり あしうして、人数』を損して いらざる事と、先人数をよせ、鉄炮を打入』させ給ひ候處に、城中より物見を出し候を、利長卿の』先手<sup>おいほら</sup>追拂へと追掛け、城きはまで追詰候處に、近々』と引請け、久世但馬其外<sup>そのほか</sup>籠りたる勇士ども下知して』五百騎ばかり咄と突いていで追崩し、利長卿旗本ちかく はら』はれけり。利家卿横合に山の崎に本陣をすへられ』けるが、そのやうていを御覽ずる處に、旗本の若者ども』すは はやよき事とおもひ、咄と立たんとするを利家見給ひて、』我下知なきにかかるべからずと仰せられ、あのていは』いまだ見方足をためらはれぬ處なり。よき時分を下知す』べしとのたまひければ、御目利のごとく味方追崩されしに、』其時あれに山崎少兵衛 其外誰々かあらんか、最早鑓合時』にて候か如何いかがと仰せられ候處に、御言葉の下より』徳山五兵衛入道、御諚のごとく鑓只今あはせ申すと相見えて、』地煙立ち申すと申ければ、扱もほいなし。あれよりつき』返すべしとの給ひけり。誠に利家卿御目利露程も違は』ざりけり。然る處に近辺の城々より助来る歴々、成政』内にての兵ども、馬上に鑓を持ち 五六十騎斗相見え候。加州』勢 山崎少兵衛より七八間先立て、鷲津九蔵と言ふ者』かけ出で一番鑓を入れけるを、少兵衛見すて助けざりけり。』山崎内の者共申けるは、九蔵つき倒されたるを見て返合、鑓を合す。越中がたに』福岡与四郎一番鑓を合せたがひに名乗りあひきびしかり』けり。さて追崩し城際までおひ打にうちけり。』半田源太郎・横



山大膳・神尾図書・三輪主水なども『手がらをして戦ける。かかる所に杉江彦四郎といふ兵、』成政内馬廻の組頭をして勇士なるが、近辺の城に』番勢に居たりしが、鳥越を加州勢責候を見付け助』来る處に、利家卿内に九里少蔵と言ふ小姓、其比蒙<sub>レ</sub>勘當<sub>レ</sub>居たりけるが、すはだにて彼彦四郎にわたり合ひ、引組ん』で谷へ落けるが、上を下へとかへしけるに、少蔵下になりて、』すでに首をとらむと杉江 刀に手をかけたる所を、下』より少蔵 小わきざしにて草摺のはずれを二刀』さし通し、ついに杉江を押伏せけり。しかれども少蔵くた』びれ、息を休めける所を、片山内膳内に伊藤十蔵と』言ふ者跡よりきたり、少蔵を押のけ、首を相討と言ふ』俣<sup>ま</sup>に奪取て、利家卿の御前に参り、見参に入れけり。』これをはじめとして、越中勢倉地猪ノ助・野間兵部、』その外歴々二十七騎討死す。加州勢手に手にうち取り、』勝時を咄とあげたりけり。其より城にもやうやう』門をさし、外様にして戦ふ間、加州勢さざめきたって、』心地能くして人数を打入給ふ。その夜 利家卿御帰陣』有<sub>レ</sub>之、後日にその品々御吟味有<sub>レ</sub>之、山崎少兵衛に黄』金三十両小袖一重くだされ、その外半田・横山・神尾・三輪』などにもそれぞれの御褒美を被<sub>レ</sub>下けり。さて杉江首の』穿鑿有て、いよいよ少蔵取たるに相究り、御前ゆるさるる』のみならず、鞍置馬を被<sub>レ</sub>下けり。さて越中成政そのころ』越中の面々召集め、加州と取合ひ初より此方、品々記付置かれ』ほうび給はり、中にも佐々平左衛門・前野小兵衛兩人は二千』石宛加増あり。其外黄金十両二十両宛に小袖道服』などをそへ給はりけり。その中にも今度鳥越にて』一番鏝合たる福島与四郎には今にはじめぬ働とて』黄金三十両刀脇指給はりけると後こそ聞えけり。』前廉秀吉公上方にて注進の刻宣ひしごとく、』利家卿成政人数を立合候はば、何時も利家卿』得<sub>レ</sub>勝利<sub>レ</sub>給ふ也。誠に秀吉公御諛少しも違はざりけり』申あへり。去るほどによはきを捨て強きに付く事のうたて』さは、越中青に在城せし菊池伊豆守・子息十六郎評議』して、加州越中の働度々に及びけれども、初は内蔵助殿』多勢なるゆへ押かかり猛威をふるふやうに候へども、度々』に味方利をうしなひ候事時の仕合に非ず、小勢を以て』多に勝給ふ事、第一には御運もつよく、何時によらず』軽々と出馬有り。その身を苦しめ家臣をすて給はず、頼』もしき名大将。その上家老の面々に善き兵どもひかへたる』よしなり。殊には日月の草木を照し給ふことくなる、』智おこ

たざる武将なれば、はたして冥加可有之。』いまだかうばしげの有る内に味方に参り、忠功を竭し』候はば、などか御感にあづからざるべしと計て、』利家卿御内には誰々といへども村井又兵衛尉は第一』家長といひ、武勇智謀もすぐれ、度々の合戦に猛威を』挙動たる人なれば、此人をたのみ可、申とさだめ、しのび』使者をつかはし此よし申ければ、此旨利家卿へひそ』かに申上ければ、彼者かくれなきねい人と聞および候。』如何可有と仰せられければ、村井御諛尤に御座候へども、』先彼ものを御味方になされ、青の城を請取り近辺御手』に属し候て、菊池忠功を御感有りて其上にて城』をも御預け候か、當座の引出物を被、下か、やうすにより』御計可、然候はんやと申しければ、ともかくも能きやうに計へ』と被、仰候處に、村井内の家老を遣はし能く示し合せ、かやうに』仕置たるよし、利家卿へ申上ければ、同年四月十二日にくりからの城へ働給ふとふれさせ津幡に人数をそろへ、』一向くりからを右に見て末守と飯山の間より越中』青の城へさしむいて、村井又兵衛を先手の大将として、』原隠岐守、片山内膳・岡島喜三郎・多野村三郎四郎・前田』惣兵衛、その外宗徒の人々都合その勢六千余騎にて』青へ馳着かせ、利家卿後詰として馬をよせ給ふ處に』菊池父子唯五十騎斗にて出向ひ御出馬未だ相延可、申と』存候處に、存の外軽々と出でさせ給ふ事、殊に悪所と申し』御名誉なり。又は御味方可、仕と申上候に付て、早速』出馬忝儀可、申上、やう無、御座、と申し、則青の城ひらき渡』申し我身は五六町斗脇に居住候處に、青の近辺菊池』に隨ざる在々所々焼はらはせ給ふ處に、内蔵助殿へ』森山の城主神保方より此由度々注進いたしければ、』頓て森山まで成政かけ付け、菊池儀口惜次第かなと、』一合戦して勝負を決せんと勇み、少々足輕を出されけれども、』はや青の城へ加州勢入かはり、利家卿も後詰に出馬』有ければ叶がたくや思はれけん。成政人数を打入られ』ければ、青の城には前田宗兵衛・片山内膳・高島九蔵、』鉄炮大将には小塚藤十郎・長田権右衛門、都合其勢千余騎入』置かれ、先人数打入給ふなり。

### （俱利伽羅・鳥越両城明け退き之事）

一、然る處に利家卿日々月々勢付ければ、成政は をのづから』かれはつるやうに成りにけり。殊に青の城主までも』利家卿の御味方に参りけれ

ば、成政家老の者ども<sup>まで</sup>迄もに心もとなくなりけり。くりから鳥越両城もおのれ』と開きのき、森山・きふね・井波三ヶ所に取籠り、おやべ川』を前にあて、つよつよと城をこしらへ、時刻をうかがひ』合戦すべしとおもはれける。扱こそ利波郡過半利家卿」の御手に入りしかば加州勢諸卒の気あらたになり、』いよいよ忠切を尽し度とのえおもひ入たる有様成り。その』時 利波郡今石動には城をこしらへたまひ、津ばたの』城に居られたる前田右近子息又四郎を入置かれ、』越中の国中を見下給ふ。成政心の内にはむねんもあり、』利波郡過半利家卿の手に入候間、定めて勝にのり おや』べ川をこし働さうべし。その時城々よりいで、もみ合い』合戦して勝負を可<sub>レ</sub>付と思はれ、番勢どもを方々』に置給ふ。先森山の城には神保を大将に四千五百余騎、』きふねの城には佐々平左衛門大将にて二千五百余騎、いなみ」の城には前野小兵衛大将にて二千余騎入置る。まず』山の城には成政馬廻かはるがわる番勢に入をかる。我身は』富山に有<sub>レ</sub>之一万ばかりの人数を引付、越中と越後』さかいに城有りて丹羽権平五百余騎入置れたり。さて』内蔵助殿越中大国とは申せども、人数を過分に抱られ』し事、不審立つ事尤<sup>もつとも</sup>なり。其故前廉書付申すごとく、』一度むほんを心にかへ、尾張内府徳川殿と一味して』北国の大将とよばれんと心の内に思はれければ、越中』山の多き国なれば、知行の内に山野までもむすび』入れ、或は上方より五千石と約束しては呼下し、六千石』七千石または千石と言合て千五百石など判形を出』されければ、我もわれもと引つどひ越中へと心ざし』下りけり。さて所付を見ればやうやう一つ五歩二つに』たらぬ物成にて、人の知りたる侍どもは いとまをこひ上』洛する。或は加州利家卿にとめられ いとまり申すも多かり」けり。その内に加賀越中取合出来ければこのうへは』流石兵ども見すて上洛もなりがたく、居とまり申す』ゆへ、思の外人数多かりけり。さても成政心に無念を拂』さむと思はれけるを、利家卿やがて心得給ひ、利波郡に取出を四ヶ所こしらへ、勝て甲の緒をしめ給ふ。鑓に日比』は かるがるしき大将と言ひ又續手にて勝軍なるに此度』も つつしみ給ふ事、中々申すもあまり有る御事とこころある兵』ども感じ申けり。

### (今石動軍之事)

一、同年五月に きふねの城に有ける佐々平左衛門尉いなみ勢』をかたらひ、五千騎ばかりにて、未明におやべ川を打』こし今石動近辺焼立てし處

に、城の内より前田』右近子息又次郎 千五六ばかりにて打出、四方八方に』下知して突合火花をちらして たがひにおめき』さけんじて相戦ふ處に、右近内歴々爰をせんとと防戦』けり。又次郎鎧を入来り給ひて、平左衛門の戦陣を追崩し』二十騎ばかり討取り 勝ち時を咄と揚たりける。又次郎 其頃いまだ』十九歳、無<sub>二</sub>比類<sub>一</sub>働き中々申斗なかりけり。其時二陣に』有ける前野小兵衛 入替りたたかひけるに、あら手のしるし』多勢なれば、右近勢突立られ武者色あしくなり、』はや能き兵ども十騎ばかり討たれにけり。かかる處に』くりからの取出に居たる近藤善右衛門・岡島喜三郎』・原田又右衛門、其外彼是千騎余助来り、何れも名乗かけかけ』揉合突立うち立ける。中にも利家卿鉄炮大将 平野』五郎右衛門 真先に進みて、五十余挺の鉄炮を』うたせしを誉めぬものこそなかりけれ。その時平左衛門返合けれども』右近・又次郎父子 大音聲をあげ、爰をもめといふ儘に』もふたりければ、越中勢ほうぼう おやべ川をこし引く』所を追討に五十余騎討取り、右近父子さざめき立て人数』を入れければ、残る人数もくりからの城へ引きにけり。此由』利家卿へ注進申しければ、斜ならず御感にて其時の』働き御吟味有りて、無<sub>二</sub>残所<sub>一</sub>御褒美被<sub>レ</sub>下けり。』

一、同年六月上方より秀吉公御書を以て、此上は越中』表へ利家人数を出され、りやうち（聊爾）の働無用に候。度々』そのおもて手柄ども、首数の注文一々及<sub>レ</sub>承候。北国の』仕置の為彼是に、秀吉公出馬可<sub>レ</sub>有間、其心得尤と度々』御使者を添えて被<sub>二</sub>御下<sub>一</sub>候處に、しかれども利家卿はあは』れ内蔵助出候へかすと、方便のみを盡<sub>二</sub>され<sub>一</sub>けれども、』成政も遠<sub>二</sub>の大將<sub>一</sub>なれば、りやうちの手出しをも仕たま』はずとなり。

### （阿尾合戦 并能登勢荒山之取出を乗取事）

一、同年六月廿四日森山に有<sub>レ</sub>之神保安藝守子息清十郎』五千余騎を引ぐし、氷見口へ相働候處に、青の城に』加州より入置れし前田宗兵衛・片山内膳・高島九蔵・』菊池父子 其外宗徒の兵ども二千余騎、民屋を焼せじ』とかかへける。はや取つき切合突立喚きさけんで』敵味方入乱 戦し處に、森山勢大ぜいなれば 青勢』突立られ、引色になる處に、鉄炮大将 小塚藤十郎など』おめきさけんで鉄炮を高所へ引のぼせ、込かへ込かへ』うたせければ森山勢鉄炮に當り少々扣<sub>二</sub>たる<sub>一</sub>その間に、』片山内膳・菊池父子など

下知して押かへし森山勢を『突立討立、互に頭を取るもあり、とらるるも有り。両方『六七十騎討れにけり。神保旗本千騎鎧を入来り、誰にも『目をかくるな、謀反人の菊池父子討取候はば、』不<sub>レ</sub>残忠節と聲々によばはりけり。青勢ども是を『聞き、菊池うたせては面々の恥辱なりと掛廻り下知』して、足掛よき所へ菊池父子さしのぼせ、おめき『叫んで戦ふ所に、また青勢突立られて、能き兵ども『四五十騎討れにけり。森山勢いよいよ氣を得て、もみ』にもんで戦ひ、青勢あやうく見えける處に、村井『又兵衛尉利家卿の名代に取出どもの城々并にここ』かしこ堅固に守り候へと、仕置のために馬印にて上『下三百騎にて参りしが、折節青へと急来候処』に、此よしを見て、さても天のあたへかと言もあへず、『三百余騎を真丸に備へ馬印をふり横鎧に懸れかかれ』と下知して、我身は真先に馬上に鎧を持かかり『ける。又兵衛大剛の者なれば、青勢是に力を得て』取てかへす。森山勢度々手柄を盡したるうちで『のこづちの馬印を見て、すはや村井かと思ふにより、』さしもにきほひたる勢なれ共はや村井に突立』られ一ささへもささへずくずれしを中坂と言ふ所まで『二里の間追討にうつほどに、五百余騎うち取り勝時』を作りかけ、いやいやあまりになが追して節所に行掛り、『引しほ大事と、又兵衛前後をかけ廻り下知して』引取けるも、村井いよいよ武威いやましになり、肩』をならぶる者なかりける。彼首共の内名有る者ども『八十三、残る首ども注文まで利家卿へささげ物に』仕たりければ、村井かやうの働今にはじめぬと言』へども、殊さらよき時分に青へ行合ひ、城に置者うた』せず候事大慶不<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>之候。以来は構而～～森山勢』出たりとも此方へ注進なく青の城を出べからずと青の』兵どもへ仰遣され、則村井又兵衛尉には黄金百両刀』則吉例として青の御馬を給はりけり。その勢を得』て能登七尾越中方より入置れしあら山と言ふ取出を』七尾勢前田孫左衛門尉・中川清六・高畠織部など大将』にて責ければ、折節城中の人数神保方に相談する』事有りて、三百ばかりのこしをき、皆森山へ兵共よびこす』時分押よせ、則時にせめ落し、防ぎ戦ふ者ども五六十騎』首を取のこるものども、山中逃入ければ、なんなく』あら山の城焼払い、七尾の城へ引返ける、これまた』利家卿聞召し御感有てその品々能く御吟味有て』御引出物給はりけり。

## (秀吉公御下向 并 成政降参之事)

一、同年八月十八日に秀吉公上方大かた無<sub>レ</sub>事を御究被<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>』数万騎を引具し加州尾山の城迄御着座ある。』後陣は未だ越前北莊ひかえに扣<sub>レ</sub>たり。利家卿かいつくろひ善<sub>レ</sub>』を盡<sub>レ</sub>し美をつくし給ふ。其後成政は森山きふね井<sub>レ</sub>』波其外の城々ひかえを引拂ひ、富山じんづ川を前にあて』万死一生の合戦して討死せんと扣<sub>レ</sub>たり。利家卿』先陣にてあんねん坂の上に出こしらへ、富山』を見下し、川際まで日々夜々に働給ふ。秀吉公』御本陣はごふく山にすへ給ふ。内蔵助家老の面々召集め』如何可<sub>レ</sub>有と各存よりの通り言はれ候へと申されければ、』山下甚八・佐々平左衛門尉すすみ、秀吉公御出馬候故』山も堀も人数と見えて候。万死一生の御合戦も』叶ひがたく存候。無事の御断有て、秀吉公へ忠切を』つくさせ給ひ候はば、長久思召ままに可<sub>レ</sub>有。其上にて』時節を御待可<sub>レ</sub>有よし申ければ、去れば此儀尤<sub>も</sub>なりと、』同事 内大臣信雄卿へ御理申され、無事の詫事』申上られければ、如何可<sub>レ</sub>有と瀧川下総・土方勘兵衛尉、』信雄卿より御使者として、秀吉公へ仰入られ候処に、』秀吉公とにかくに内蔵助に腹をきらせ候へと御返事』有りし處に、かさねて兩人をつかはされ内蔵助』事 信長公よりの者なれば、今度の儀御ゆるし候』へと御本城達って御詫言有りければ、さらば仰せに』まかせ可<sub>レ</sub>申候。然れども又左右衛門次第と御意候時、』利家卿謹みて、忝<sub>かたじけな</sub>き御意に候。然共両年が間、度々戦』候といへども一度も内蔵助に利を得させたる儀』無<sub>レ</sub>御座<sub>レ</sub>候。其上若年よりたがひに信長公につかへ奉り』し時分も、猶以て内蔵助にこされける事御座なく候間、』その處は御心安く思召れ候へと被<sub>レ</sub>申上<sub>レ</sub>候へば、何れも大名小』名御前に並居たるが、扱も文武の大將やと利家卿』を誉めぬ者なし。其上秀吉公仰らるるは、尤<sub>も</sub>利家の申』され候ごとく、其方と内蔵助武道くらべ所なし。それ』は申さるる迄もなく、隠なき次第なり。此上は内蔵助せんゑ(染衣?)』の躰にて罷出候へ。信雄卿の御詫言の上は無<sub>レ</sub>是非<sub>レ</sub>新川一郡』可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>のよし被<sub>レ</sub>仰出<sub>レ</sub>、九月五日に内蔵助殿出仕に相極め』その時 利家卿の陣所を通り出仕申刻、先陣後陣大音』聲にて咄と笑ひけり。成政さこそ心の内無念に有ら』んつれども、さらぬ躰にて出仕申されける心の内』あはれなり。越中国中御仕置残す所なく被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>利波郡中郡姉負合三郡をば利家卿へ一兩年仕置し』て利長に渡可<sub>レ</sub>申となり。則判形頂戴なされ、新川』一郡は佐々内蔵助にたまはりける。悉境目巳下御法度』仰出され、加州金沢の城まで秀吉公御帰陣なされ。九』月十日に利家卿をめして、今度も忠節

誠に不<sub>レ</sub>浅次第』に候。内蔵助大国をもち、むほんを心にかけ、人数をこし』らへ、殊に縁者の結びを企てたばかり心をとげさせ、』その上多勢を以て働き候處に、度々の合戦に切勝ち、越』中利波郡まで切取候事、無<sub>レ</sub>比類<sub>レ</sub>手柄の段、日本にお』いて武門の棟梁たるべしと御感状に羽柴筑前守』と御名字御名共に其儘被<sub>レ</sub>下候事唐土天竺は』しらず日本にをいては かやうの手がら有がたし』と世誉てうらやまざるはなかりける。是そ君々たり』臣々たる御世なりと申しあへり。其後利家卿の』家老の面々被<sub>レ</sub>召出<sub>レ</sub>御直に今度の取合に各手がら』ども上方へ相聞え、尤<sup>もつとも</sup>満足<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>過之候。利家卿御舎兄』前田蔵人入道を被<sub>レ</sub>召出<sub>レ</sub>久々にて逢候よし御意に』て御小袖御道服など被<sub>レ</sub>下、さて村井又兵衛召出され、』今度も骨折手柄とも聞及候と御意にて、黄金百』両長光の御腰物御道服など被<sub>レ</sub>下、不破彦三に黄金百両』御道服、前田右近におなしく被<sub>レ</sub>下、長九郎左衛門・高島弥次郎』・奥村助右衛門・中川清六・前田五郎兵衛などに黄金五十両御』道服一かさね、何れもその品々聞召届られ御褒美被<sub>レ</sub>成、』右の外五六人に黄金二十両宛被<sub>レ</sub>下候也。誠に有がたき』御はからひと、利家かうべを地に付け、御礼被<sub>レ</sub>申上<sub>レ</sub>候。さて御』帰陣之刻、重而 不破彦三・村井又兵衛尉兩人を秀吉公御前へ被<sub>レ</sub>召出<sub>レ</sub>、度々先陣のよし無<sub>レ</sub>比類<sub>レ</sub>働と仰られ、』御具足羽織を被<sub>レ</sub>下けり。弓矢取る身の面目何事か』これにしかんやと諸軍勢見聞くほどのものうらやま』ざるはなかりけり。夫よりさざめき立ちて御上洛有りに』けり。その比より兩年過ぎ越中新川郡も利家卿に』代官分と被<sub>レ</sub>仰出<sub>レ</sub>拝領有り。そののち筑紫御陣の時、がんじゃく(岩石)』の城を子息利長卿手柄つくされ候へば、さても』父筑前守の子也。鷹は鳶を生まぬものなりと、誉めぬ』者こそなかりけり。重而 関東御陣の時、利家卿北国の』大将として出馬有り。ほどなく上野国松枝へをし詰め』色々城主より詫言申候間、無事にして城を請取、』先勢へ大道寺をも召加へられ案内せさせ、武蔵』国八王寺関八州の名城なるを即時に責落し給ひ、』奥州の仕置に出羽国まで利家卿・利長卿御父子』御越のとき、きぬ川をはや先手の人数半分ほど』も川向へこしたるに俄<sup>にわか</sup>に大水出来りて、中々舟なら』ではかよひも成がたきに、諸勢見つくろひ、川のこ』なたに人数立居たる處に、利家卿京見ずといふ』名馬に乗かへ給ひ、彼川へのり入れたまへば、上下あ』はてさはぎて、我先にと乗入乗入渡すほどに、』川下せきとめられて一人も残らず、むかふの岸に』かけのぼる。その夜は利家卿本陣を川のこなたに』すへたまはば一揆をこり、先の人數討取べしと聞こ』へしが、さてもむかしの宇治川を

渡せし先陣は『家のため身の為也。今利家卿は人数を討たせじと』一命を水に溺るともかへり見ず渡し給ひし事、『中々古今に希なる名大将と、その時みる者』は不<sub>レ</sub>申及<sub>レ</sub>、後々きく人までも、感申さぬはな<sub>レ</sub>かりける。其後 大納言の御位にへあがりたまひ、『猶於<sub>レ</sub>天下<sub>レ</sub>かたを雙<sup>なら</sup>ぶる人もなかりけり。夫より』秀頼公御守につきまいらせられ、目出度く武将』の行衛やと申さぬ者はなかりけり。

右此書物をかつかつ取集申候事は、私儀先』年 佐々内蔵助殿に馬廻に有<sub>レ</sub>之候て、末守』の御後巻少し前廉に子細御御座候而うつくし』ぞくに成政卿へ断申し境目までおくられ加州へ』罷越利家卿へ馬廻に罷出、末守の後詰の刻』罷出、手をも塞ぎ候て能登加州越中取合』のやうす日記にまかせ書付申候。今程は越前』織田辺に有<sub>レ</sub>之申候。久瀬但馬も古き傍輩』ゆへ、めをかけられ候事、何れも可<sub>レ</sub>存候。右之通』偽少しも無<sub>レ</sub>御座<sub>レ</sub>候。但落申事は有<sub>レ</sub>べく候。我等儀伏』見御ふしん有<sub>レ</sub>之時分より老人と申し、病者ゆへ』御暇を申候て、越前へ引込申候故、其後利家公御』威光くはしく不<sub>レ</sub>存候間書付不<sub>レ</sub>申候。御若人様数度』御使をください、御所望の間唯今日々の日記取集め』進上申上候。委細は堀江殿へ申入候間早々申上候。』老後の悪筆御一笑。

九月十五日

岡本 慶雲 在判

長見右衛門尉 様

参



### (あ)

- ・会釈－あしらい、相手になる
- ・あいやけ－娘婿の親同志
- ・後詰－うしろづめ、後だて
- ・うたてさ－情けない、いやなこと
- ・うつくしぞく－一人の心や態度が美しいこと
- ・馬じるし－主将の側にあつて所在を明示する標識
- ・馬廻－主将の周りにあつて警護にあたる騎馬の侍

### (か)

- ・かぶいたる－すぐれた
- ・かひをたてる－出陣の合図をする
- ・搦手（からめて）－城のうら門
- ・御感－貴人が感心したり満足すること
- ・草摺（くさずれ）－鎧の下に垂れて大腿部を覆うもの<甲冑の一部>
- ・家司－公家におかれた職員、これになつたもの
- ・下知－命令する
- ・こうばしげ－こうばしい、心がひかれる
- ・小姓－主将の側近にあり雑務にあたる者
- ・御諛－お言葉

### (さ)

- ・さざめく－ざわめき、にぎやかな音や声
- ・宗徒－宗門の信徒
- ・入魂－じっこん、とりわけ親密であること
- ・忍緒（しのびのお）－兜の緒
- ・十高祖張良－漢の高祖「劉邦」と忠臣張良の間柄
- ・陣ふれ－出陣の命令
- ・染衣－出家、せんい
- ・節所（せつどころ）－変化に富んだところ
- ・爪牙の臣－主人の手足となつて働く家来

### (た)

- ・注進－大事を急いで報告する。
- ・注文－注進の文書
- ・手負－手おい、傷つく
- ・棟梁－かしら
- ・道服－道中の服、羽織

- ・ 取りつくるふーととのへる
- ・ 取出ー砦、出城、本城の外に造った小規模な城

(な)

- ・ 人数ー軍勢
- ・ 倭人ーねいじん、口先が上手で心のよこしまな人、へつらう人

(は)

- ・ 判形ー文書などに押した印
- ・ 表裏ー言葉と内心がちがう、陰日向がある
- ・ 風聞ーうわさ
- ・ 平均ー平定
- ・ 母衣衆ー戦闘中、本陣と先手をかける軍令。ほろしゅう

(ま)

- ・ 見つくるふー見はからう
- ・ みつぐー支援する
- ・ 冥加ー神仏の加護を受ける、みょうが
- ・ 物成ー領主や家臣に収める年貢米

(や)

- ・ 矢留ー休戦
- ・ 鑓ぶすまーやりぶすま、襖のように鑓を並べる

(ら)

- ・ 聊爾ーりょうじ、思慮無きこと、軽々しくいい加減なこと